



地域ケア会議を起点とした 官民連携による地域課題解決 に関する市町村向けガイド

経済産業省
令和5年度ヘルスケア産業基盤高度化推進事業
(サステナブルな高齢化社会実現及び当事者参画型開発普及に向けた関連事業)



令和6年3月
株式会社日本総合研究所

目次

はじめに P3

第 1 章 官民連携による地域づくりに向けた地域ケア会議の実践 P4

官民連携による地域づくりにおける地域ケア会議の重要性 P4

官民連携の取組に向けた現在の地域ケア会議の課題 P4

官民連携の取組に向けた効果的な地域ケア会議のあり方 P6

第 2 章 地域ケア会議を起点とした地域課題の検討および官民連携によるアプローチの検討 P10

地域課題検討の難しさ P10

地域ケア会議を起点とした地域課題の検討および官民連携によるアプローチの事例 P11

はじめに

多様な地域資源を活用した地域づくりに向けて

- 単身や夫婦のみの高齢者世帯、認知症の高齢者が増加している中、多様なニーズを持つ高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためには、介護保険サービスだけではなく、住民同士の互助的な活動や、民間企業等が提供するサービス（介護保険給付の対象とはならない民間企業が提供する保険外サービス）等、さまざまな地域資源を活用していくことが重要である。特に、地域の高齢者の中でも事業対象者・要支援者等比較的軽度な方の生活支援においては、地域の民間企業等が提供するサービスが活用できる余地が大きいと考えられる。
- 介護保険サービスだけでなく、保険外サービスも活用した生活支援を実施することは、給付費の適正化や人材不足の解消、高齢者のさらなる自立支援につながることが期待できる。今後は事業対象者や要支援者の生活支援分野における官民連携の重要性がますます高まると考えられる。
- 介護予防の観点では、介護予防ケアマネジメントや自立支援型地域ケア会議など、さまざまな市町村事業により、事業対象者や要支援者の支援が行われているが、地域づくりという観点では、1対1の個別支援に取り組むことはもちろん、個別支援の積み上げから見えてくる地域課題についても、市町村が中心となって取り組んでいくことが重要である。

本書の想定読者と活用イメージ

- 経済産業省が令和5年度ヘルスケア産業基盤高度化推進事業の一環として実施した「地域ケアプラス事業」では、以下2点を目的として9つの市町村と連携した事業を実施した。
 - ① 地域ケア会議で取り扱う個別ケースを起点とした「地域によくあるニーズ（＝地域課題）の抽出
 - ② 地域の民間サービスなど、多様な地域資源を活用して地域課題を解決する取組の検討
- 本書は、「地域ケアプラス事業」での実践事例を通して、官民連携による地域課題解決の取組を行う際のポイントや、官民連携による地域課題解決に取り組む場合に、個別ケースや地域課題をどのような視点・粒度感で整理する必要があるかをまとめている。現場の実践のヒントとして、全国の市町村担当者等に参照いただきたい。

※事業の詳細は、令和5年度ヘルスケア産業基盤高度化推進事業報告書を参照

読んでいただきたい方

- ◆ 市町村の地域包括ケアシステム関連事業ご担当者
 - ・ 地域ケア会議ご担当者
 - ・ 生活支援体制整備事業ご担当者
 - ・ 総合事業ご担当者
- ◆ 生活支援コーディネーター
- ◆ 地域包括支援センター職員 等

本書の活用イメージ

- ◆ 地域ケア会議のあり方を検討する際の参考として
- ◆ 高齢者の暮らしを支える地域づくりのための官民連携の取組を推進する際の参考として
- ◆ 地域における保険外サービスの活用促進に取り組む際の参考として

第1章 官民連携による地域づくりに向けた地域ケア会議の実践

官民連携の取組推進における地域ケア会議の重要性

- 一般企業において新商品の開発や商品の改良等に取り組む際、多くの企業では「ペルソナ」（ある製品やサービスの典型的な顧客像）を整理する。「こんな人物がこの商品を使う」という具体的な「個」をイメージすることで、訴求力の高い製品・サービスの開発・販売や、関係者との認識共有を促進することが可能になる。
- 多くの自治体で行われている地域ケア会議（特に軽度者のケースを扱う自立支援型地域ケア会議）は、まさにこうした「個」の人物像の情報にあふれており、企業がその地域で事業を行う上で「欲しい」情報がたくさん眠っていると言える。

＜ペルソナのイメージと活用方法＞

【ペルソナ③】車を手放し移動支援が必要になったフレイルシニア男性

ビジュアルイメージ		基本属性	
	性別	男性	
	年齢	80歳	
	世帯構成	夫婦	
	主な居場所	家、趣味の集まりや慣習の場	
	経済状態	ふつう	
心身機能の状態			
心身機能の状態	フレイル		
フレイル-要介護状態の場合の詳細	リハビリに痛みがあり、定期的な運動はできず、筋力の低下を感じている。普段の生活の中でも、疲労感を感じるようになってきた。		
交通の利便性・日常の移動手段・情報の主な手段			
交通の利便性	自宅は最寄駅から徒歩 20 分。近隣のバス路線あり		
日常の移動手段	電車を中心に、バスも時々利用。従来の公共交通機関に加え、住宅地と最寄り駅を結ぶコミュニティバス（自動運転の可能性あり）が普及し、家の近くの地域の拠点（公民館、図書館、公園、スーパー等）への移動に利用可能。ただし、ドア to ドアの移動支援の普及は限定的で、最寄りの停留所までは徒歩へ移動する必要がある。		
情報の収集の主な手段	デジタル端末上での情報収集が一層普及。新聞・テレビなどの従来のメディアも活用。2020 年に普及しているスマートフォンは異なるデジタルデバイスが主流となっている可能性もある。		
社会参加に関する状況等			
高齢期の社会参加を充実させる上での課題・ニーズ	最近車を手放し、公共交通機関を利用するようになったが、足腰が弱っていると感じる。買い物や病院通い、趣味のサークルへの移動などが負担に感じているようになってきた。		
2040 年までに実現する社会参加促進策	【施策 3-2】AR/VR 等を活用した自己啓発・趣味活動の充実 【施策 5-4】シニア向け移動介助付きオンデマンドバス		
2040 年に実現を目指す社会参加の状態（例）	最近車を手放し、公共交通機関を利用するようになったが、足腰が弱っていると感じる。買い物や病院通い、趣味のサークルへの移動などが負担に感じている。以前は車で趣味のサークルに通っていたが、マッチングプラットフォームの活用により、家から徒歩圏内の場所でも似たようなサークルがあるようなので、今度のぞいてみようと思う。		

出所：東京都「将来の高齢者像と社会参加促進策に関する企画立案等業務委託」

具体的な人物像
があると…

1

よりユーザーの視点に立って、
製品・サービス利用シーンの想像ができる

より詳細な情報を基に、あえて対象を絞り込む
ことで、より訴求力の高い製品・サービスの
開発や販売につながる
⇒一定のユーザーに“刺さる”可能性が高まる

2

関係者との認識共有を促進できる

性別や年齢に加えて、価値観やライフスタイル
まで含めた情報を整理することで、一定程度共通
した人物像を思い描けるようになる
⇒企業内でのコミュニケーションが円滑になる

官民連携の取組に向けた現在の地域ケア会議の課題

- 地域づくりにおいて非常に重要な個別ケースを扱う地域ケア会議だが、現在官民連携のきっかけとして地域ケア会議を活用できている事例は限定的である。その背景には①多くの市町村における地域ケア会議が「廃用・重症化予防」にフォーカスしており、**生活支援や自立支援の視点が十分でないこと**、②地域ケア会議で検討するケースにおける**生活課題やニーズの解像度が低いこと**、③支援困難ケースの検討が中心になっており、**地域に共通する課題が見えにくいこと**、などがあると考えられる。

地域ケア会議における 課題①

生活支援や自立支援の視点が不足している

- 通常の地域ケア会議の多くは「廃用・重症化予防」に向けた議論（具体的には以下）が中心となっている。
 - 廃用予防（運動・リハビリ）
 - 医学的管理（通院・服薬）
 - 栄養管理（食事・水分）
- これらの検討は再入院や施設入所リスクを防ぐために非常に重要である。一方で、これだけでは高齢者の生活に関する情報（買い物はどうしているのか？日々の暮らしの中で何に困っているのか？）が欠落する可能性がある。
- また、医学的管理や栄養管理等は専門職の領域であり、民間企業がすることが少ない領域でもあると考えられる。高齢者の生活に関する情報を含めて高齢者の暮らしの全体像を把握することで、民間企業と連携した取組につながる可能性が生まれやすくなる。

<生活支援・自立支援に着目した地域ケア会議の重要性>



出所：愛知県豊明市提供資料

地域ケア会議で取り扱う各ケースについて、
本人の「生活支援・自立支援」につながる
情報をしっかりと収集する

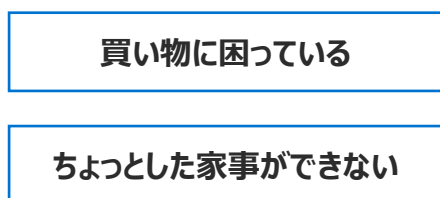
↓
高齢者の暮らしを支えるための
官民連携の糸口になる

地域ケア会議における 課題②

個別ケースの検討における生活課題やニーズの解像度が低い

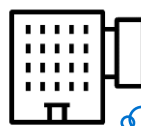
- 地域ケア会議で高齢者の生活に関する情報を収集し、生活支援・自立支援における課題を検討している場合でも、課題やニーズの解像度が低い（整理が大雑把な）ことがある。課題が大雑把すぎると、企業としても具体的なサービス改善のアイデア創出にはつながりにくいと考えられる。
- 課題の概要を示すことは非常に重要であるが、官民連携の糸口にすることを考えると、例えば買い物であれば「何を買いに行きたいのか」、「買い物の各プロセスの中の、どこに困っているのか」「いつから、なぜ買い物に困るようになったのか」等、具体的な課題・ニーズの情報が重要になる。

抽象的なニーズ・課題



大きな課題整理も重要だが、このまま企業に提示すると…

民間企業



うちは家事支援の企業ではないので関係なさそう・何もできなさそう

地域ケア会議における 課題③

支援困難ケースの検討が中心になっており、 地域に共通する課題が見えにくい

- 多くの地域の地域ケア会議は、支援拒否や複合的な課題を抱えたケースなど、困難ケースへの対応について多職種で検討することがメインとなっている場合が多い。困難ケースをさまざまな専門職の視点で議論することは地域ケア会議の重要な役割であるが、困難ケースの多くは「その人特有の課題」を抱えており、「その人専用の支援」が必要になることから、官民連携の足掛かりにはなりにくい。
- 民間企業の目線では、「特定の人に特化した課題」へのアプローチはビジネスとして成立しにくいと考えられる。地域ケア会議では困難ケースだけでなく、「地域によくある課題・ニーズを抱えたケース」も意識的に検討することで、地域に共通する課題・ニーズ（民間企業としてもビジネス化しやすい課題・ニーズ）の発見につながる。

<地域に「よくあるケース」を検討することの重要性>

支援困難ケース



その方特有の課題・
その方専用の支援

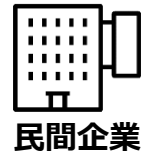
対象者が少なくビジネス
として成立しにくい

地域に「よくある」ケース



他の人にも共通する課
題・必要な支援
⇒地域課題・地域で
必要な支援の発見

地域で多くあるニーズであれ
ば、ビジネスが成立しやすい



民間企業

官民連携の取組に向けた効果的な地域ケア会議のあり方

- 特に軽度者のケースを扱う自立支援型地域ケア会議を効果的に行うことによって、地域ケア会議から官民連携の取組の手がかりとなるニーズや地域課題を抽出することが可能になる。
- 本項では、官民連携の取組に向けた効果的な地域ケア会議のあり方についてポイントを整理する。

どのようなケースを、誰と検討するのが効果的か？

- 官民連携の取組に向けては、「フレイル～要支援程度の軽度者のケース」かつ「各地域における『よくある』ケース」を検討することがポイントである。
- 「廃用・重症化予防」に医学的管理や栄養管理等の議論だけでなく、本人の「生活支援・自立支援」につながる議論も含めて幅広い視点で検討するためには、専門職だけでなく生活支援コーディネーターや地域の生活支援関連の民間企業等の参加も有効であると考えられる。

検討する ケース

- フレイル～要支援程度の軽度者のケース（＝自立支援型地域ケア会議の対象）**
 - 重度者のケースでは介護保険サービスの重要性が高まるため、官民連携による生活支援・自立支援を検討する際には軽度者のケースを検討することが重要である。
- 各地域における「よくある」ケース**
 - 保険外サービスを活用した課題解決を目指す場合は「その人特有の課題」だけでなく「地域によくある課題」を議論することも重要である。ケース検討においては、各自治体で「よくある」ケースをあえて検討することが有効だと考えられる。

参加者

- 介護保険サービス以外の地域資源や、高齢者の生活課題に精通したメンバーを入れる**
 - 医師や薬剤師、PT・OT・ST等の専門職だけでなく、生活支援コーディネーターや地域の生活支援関連の民間企業など、介護保険サービス以外の地域資源や、高齢者の生活課題に精通したメンバーと一緒に検討することが重要である。
- 生活支援・自立支援に向けたケースの深掘りができるファシリテーターを入れる**
 - 市町村職員や専門職など幅広い職種が参加する中で、ケースごとに真のニーズ・地域課題を深掘りし、生活支援・自立支援に向けた検討を行うためには、会議の目的を理解し適切にファシリテーションのできる人材が重要である。
 - 初期的には、先進的な自治体の地域ケア会議の視察や、ファシリテーターの招聘等により、内部でファシリテーターを育成していくこと等が考えられる。

どのような情報を集めて議論すると効果的か？

- ・ 地域包括支援センターやケアマネジャーは、（介護予防）ケアプラン作成や日々のかかわりの中で、各高齢者の状況をかなり詳細に把握していると考えられる。（自立支援型）地域ケア会議で高齢者の生活課題を把握し、地域課題の検討につなげていくためには、地域包括支援センターやケアマネジャーの持っている多様な情報のうち、生活課題の検討に必要な情報を引き出し、参加者で共有することが重要である。
- ・ 生活課題の検討に必要な情報について、本書では、①基本情報、②本人の生活の様子・利用サービス、③本人の望む暮らしに関する情報、④本人の望む暮らしを踏まえた生活課題、⑤その他、の5つの軸で整理する。

①基本情報

項目	記載のポイント・記載例
年齢・性別	—
障害・認知症	—
要介護区分	—
住環境	◆ 特に外出等の生活課題を検討する際に住環境情報は重要であり、周囲の状況や住んでいる地区の特徴等も含めて詳細に記載する 【例】 ・ 住居タイプ（戸建て／マンション〇階 等） ・ 周囲の状況（周囲は田んぼに囲まれている／家庭菜園の畑が隣接している 等） ・ 住んでいる地区の特徴（平地で比較的人口が集積している／高台にあり近隣に坂道が多い 等）
世帯構成・家族情報	◆ 家族によるインフォーマルケアの状況を把握するために、同居・別居の情報だけでなく、家族とのかかわりや家族側の体調、本人と家族の関係性等についても記載する 【例】 ・ 世帯構成（独居／長女一家と同居 等） ・ 家族の状況（長男は市内在住／長女は数年前から〇〇により体調不良 等） ・ 本人と家族の関係性（同居している長女とは仲が良い 等）
体重・BMI	◆ フレイル該当者が判断するため、最新の情報を記載する ◆ 体調や生活の変化につながるため、直近で体重やBMIに変化がある場合はその情報も記載する
医療情報・服薬情報	—
申請前の暮らし	◆ 申請のきっかけとなった出来事の前で生活がどのように変わったかを把握し、今の生活課題を浮き彫りにするために、以前の暮らし（申請前、相談前などの暮らし）がどのようなものだったのかを記載する 【例】 ・ 転倒による骨折前は、長女とランチや旅行に行くことが楽しみだった。自転車で好きなカラオケ喫茶に行っていた。
申請のきっかけ・その後の経過	◆ 本人の生活の変化のきっかけが捉えられるよう、相談・申請のきっかけとなった出来事と時期その後の経過について、時系列が分かるよう記載する

②本人の生活の様子・利用サービスに関する情報

	項目	記載のポイント・記載例
本人の生活の様子	身体の状態	◆ 身体の状態（体調や歩行の状況、難聴など）は、本人の「望む暮らし」をかなえることや、官民連携による課題解決を検討する際の制約条件となるため、最新情報を詳細に整理する【例】 ・ 歩行はシルバーカー利用をしながらも独歩。500m程度であればひとりで歩くことができる ・ 高度の難聴があり、身体障害者手帳（6級）を所持。左耳はほとんど聞こえず、右耳もかなり大きな声でないと聞こえないため、やりとりの困難さがある。
	食事・調理の状況	◆ 自ら調理／家族が支援／宅配サービスを利用、等の状況を把握し、記載 ◆ 歯がない・入れ歯が合っていないなどの制約条件があれば併せて記載する
	買い物の状況	◆ 「食料品（生鮮食品）の買い物」、「日用品の買い物」、「嗜好品・娯楽のための買い物」等さまざまな種類がある。どの種類かによって必要な支援やその頻度が異なるため、区別して状況を記載する【例】 ・ 食料品は自分で選びたいが、〇年前の骨折をきっかけに自転車を手放したことでスーパーに行けなくなり、現在は週3回来訪する長女に任せている（食料品の買い物） ・ 家から〇mの場所にある複合商業施設に、お出かけ用の服を買いに行くのが楽しみで、2か月に1度一人で出かけており、今後も続けたいと思っている（嗜好品・娯楽のための買い物）
	交流・娯楽の状況	◆ 高齢者の生活支援においては「この人が何に生きがいを感じるのか」という視点が重要であり、交流や娯楽については「何に楽しみや生きがいを見出しているのか」という観点で記載する。人との交流だけが娯楽とは限らないため、自分ひとりでできる趣味や楽しみ等についても記載する【例】 ・ 家の畑で季節の野菜を作っており、それを昔の職場の同僚（月に数回家を訪ねてくる）に分けるのを楽しみにしている ・ 内職が趣味であったが、熱中しすぎて体調を崩すことがあったために、〇年前から家族に止められている
	ネットリテラシー・決済の状況	◆ 多くの民間企業のサービスはスマートフォンやインターネットが使えることや、電子決済を利用できること等が前提となっているため、ネットリテラシーや決済のしかたなどを把握する
利用サービス	フォーマルサービス	◆ 通所型サービスや福祉用具レンタルなど、利用しているフォーマルサービスを記載する ◆ 特に通所型サービスや訪問介護等は、週何回利用しているか、頻度を記載する
	インフォーマルサービス	◆ 通いの場やボランティア等による支援だけでなく、家族による支援についても記載する ◆ 支援の内容と併せて頻度についても記載する

③本人の望む暮らしに関する情報

項目	記載のポイント・記載例
本人の望む暮らし	◆ 民間企業の目線でも「本人が望んでいる暮らし」は「この人は何にお金を払うか」に深くかわる情報として重要であり、「支援者目線での目標」ではなく、「本人が望んでいる暮らし」についての情報を記載する。また、現在できていて、「継続したいこと」と、今できておらず「今後できるようにしたいこと」は分けて記載する 【例】 （継続したいこと） O m先のスーパーに、週3回は好きなお惣菜を買いに行き続けたい（出来るようにしたいこと） バスに乗ってカラオケ喫茶に行けるようにしたい
本人の価値観	◆ 支援者からは必要なことに思えても、本人が良しとしなければサービスの利用（お金を払う行為）にはつながらないため、本人の価値観・気持ちの部分で把握していることを記載する 【例】 お年寄り扱いされたくないため、家電のことや携帯電話など、デジタル関連で困ったことや分からないことがあっても周囲の人に聞きにくい

④本人の望む暮らしを踏まえた生活課題

- ✓ ②本人の生活の様子・利用サービスに関する情報および、③本人の望む暮らしに関する情報を踏まえて、支援者の目線で生活課題を記載する。
- ✓ 自立支援型地域ケア会議で検討する比較的軽度者のケースでは、「現在生活課題として表出していないが、きっかけによって生活が多きく崩れるリスク」を内包しているケースもあると考えられるため、こうしたケースは近い将来のリスクについても記載する。

⑤その他

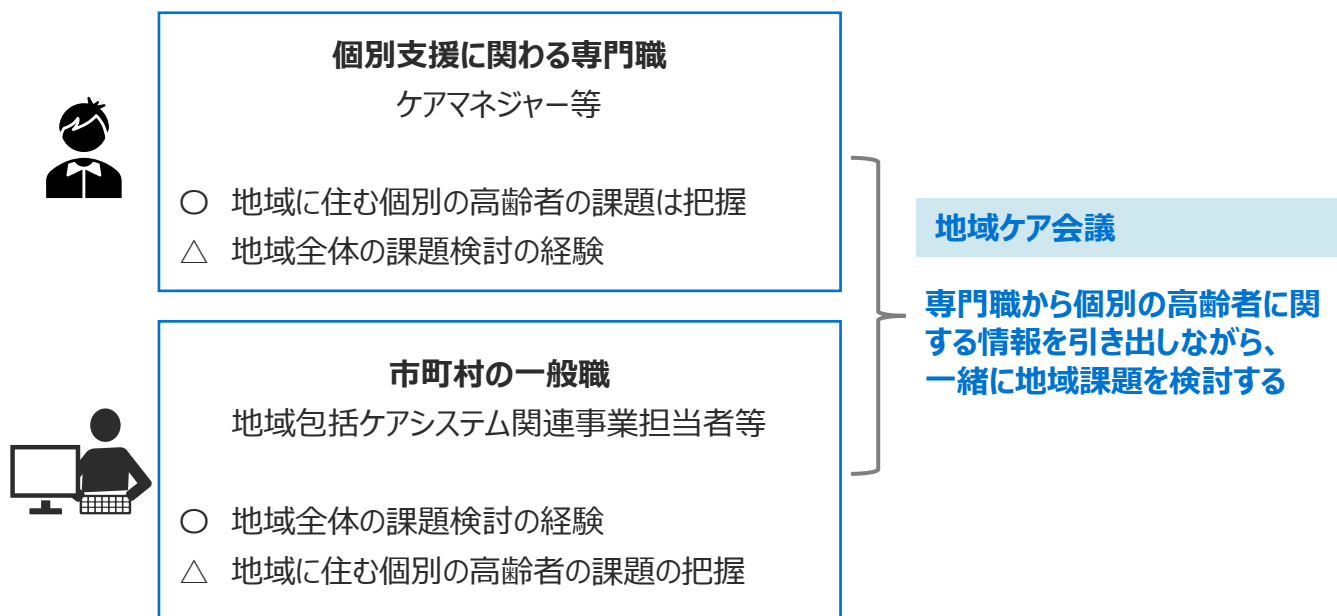
- ✓ 直近のカンファレンスの時期・直近のカンファレンス時の様子 等

第2章

地域ケア会議を起点とした地域課題の検討および官民連携によるアプローチの検討

地域課題検討の難しさ

- 地域ケア会議においては、個別ケースの分析から地域の課題の検討を行い、資源の充実等につなげることが期待されている。一方で、「個人の課題」から「地域の課題」を抽出することに苦手意識のある市町村も散見される。
- その一つの要因として、個別支援に関わる専門職にとっては「個人の課題」は理解できるものの「地域課題」は漠然としていてイメージしにくく、一方で市町村の一般職にとっては「個人の課題」を深く把握する機会がなく、「地域の課題」を「制度や仕組みづくり」の観点から検討していることがある。
- 地域ケア会議の場で、市町村の一般職が、専門職から個別の高齢者に関する情報を引き出しながら、一緒に地域課題を検討していくようなあり方が望ましいと考えられる。



地域ケア会議を起点とした地域課題の検討および官民連携によるアプローチの事例

- 経済産業省が令和5年度ヘルスケア産業基盤高度化推進事業の一環として実施した「地域ケアプラス事業」では、複数の自治体で実際に、官民連携による地域づくりに向けた地域ケア会議を行った。さらに、地域ケア会議で検討した個別ケースの情報から「地域によくあるニーズ（＝地域課題）」を抽出し、地域の民間サービスなど多様な地域資源を活用して地域課題を解決していくための検討を行った。
- 次のページ以降で、地域ケアプラス事業に参加した自治体から実際に提出されたケースと、各ケースから導き出された地域課題、地域課題を解決するための官民連携のアイデアについて記載する。地域ケア会議で扱う個別ケースを起点とした地域課題の検討や、官民連携の糸口として参考にしていただきたい。

【ケース情報】

①基本情報

77歳／女性／要支援2／戸建て（昔ながらの平屋）／
独居（結婚歴なし、一人っ子、市内外にいとこ2名）／BMI14.6（虚弱）

②本人の
生活の様子・
利用サービス

身体の状態

- ・ 2019年、2022年にそれぞれ、左大腿骨、左ひじ、右ひじを骨折しており、今も痛みが継続している。「痛くて全然ダメ」が口ぐせ
- ・ すり足でゆっくり歩いている
- ・ 143cm、30kgであり、近年大幅な体重の増減はないものの、虚弱状態
- ・ 歯がないが、入れ歯が合わず使っていない

食事の状況

- ・ 歯がなく、入れ歯も合っていないため、週1・2回、約300m先の商店で買ってきた総菜を自ら加工して食べている（昔から通っている商店であり、食べなれた味の総菜を好んでいる）
- ・ 食事は美味しく食べており、通っているデイサービスでも全量を摂取
- ・ お弁当の宅配は包括の勧めで複数試したが、好みに合わなかった

通院・買い物の状況

- ・ 近所の商店まで歩行器を使って行き、総菜を購入して食べている
- ・ 月3回市の買い物同行支援を活用し、スーパーマーケットで日用品等を購入している

交流・娯楽の状況

- ・ 人付き合いは苦手で交流は週1回のデイサービス程度
- ・ 「音がないとなんだか寂しいからね」と毎日ラジオをつけて生活している

フォーマルサービス

- ✓ 通所型サービス：週1回
- ✓ 歩行器、上がり框すりレンタル

インフォーマルサービス

- ✓ 買い物同行支援：月3回
- ✓ 自宅の木の剪定：年1回

③本人の
望む暮らし

- ・ 近所の商店まで徒歩で行き、総菜を買うことを続けたい
- ・ 自宅での生活を継続したい

④望む暮らし
を踏まえた
生活課題

- ・ 今は自分のペースで自宅での生活を続けているが、歩けなくなってしまうと買い物・食事を含め生活が成り立たない可能性がある
- ・ 買い物支援の継続
- ・ 独居のため困りごとの相談者が不在

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

- ◆ 身体の痛みにご本人は苦しんでおられるようだが、それ以外に、困ったエピソードや、イレギュラーな対応が求められたことはあるか。

右ひじの骨折時は、包括のケアマネジャーのところにSOSの電話がかかってきた。親族や近所に相談出来る人がおらず、緊急時に頼れる人がケアマネジャーしかいない。その後も転倒時はいつもケアマネジャーに電話がかかってくる

- ◆ 「音がないとなんだか寂しいからね」というご発言が、本人の気持ちを表している。こう感じるようになったきっかけや経緯などがあるか。（高齢者の本音の深掘り）

骨折による入院を機に医療職と関わり、人と関わる楽しさを感じたようだ。それまではマスクをつけ、帽子をかぶり、人と話すことが苦手だった。本人も「入院してから人が変わった」と話しており、ラジオやテレビにより人の気配を感じているようだ。

- ◆ 現状月3回の買い物同行支援もあり、買い物に困っていないように思うが、生活課題に「買い物支援の継続」を挙げているのはなぜか。

支援員側も高齢化しており、今後同じ支援が継続できるか分からない。また本人の性格的に、新しい担当者とすぐに打ち解けることが難しいため、担当者の変更がないのが望ましいと思う。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- （独居で頼れる親族や近隣住民等がおらず、ケアマネジャーにすべて連絡・相談している高齢者）ケアマネジャー以外に気軽に相談できる人が欲しい
- 人付き合いは苦手だが、ひとりで無音で生活していると寂しい
- 骨折などの緊急時はケアマネジャーしか頼れず、毎回申し訳なく感じる

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）と官民連携による取組例

地域課題

頼れる親族や近隣住民等がない独居高齢者の身近な相談相手の確保・地域コミュニティへの参加・交流の促進

民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

① 高齢者の生活導線上でのコミュニティ形成により、参加・交流しやすい環境をつくる

連携先候補となる民間企業	・ 移動販売事業者 ・ スーパー ・ ドラッグストア など
取組例	・ 移動販売やスーパー、ドラッグストアなど、高齢者が生活上頻繁に利用する場所の一角にコミュニティスペースを設ける ➢ （例）移動販売車の前に椅子と机を設置し、買い物のついでに休憩・交流ができるようにする
民間企業側のメリット	・ コミュニティ形成によりリピート率が上がり、集客につながる
民間企業と連携する際のポイント	・ コミュニティ形成が軌道にのるまでは、生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が介入し、集客に向けた広報活動などを積極的に実施することが有効

② 高齢者が「教える側」に回ることができるコンテンツ企画により社会参加意向の少ないシニアの参加意欲を醸成する

連携先候補となる民間企業	・ 携帯キャリアショップ など
取組例	・ スマホ教室でスマホの使い方を教わった高齢者の中からボランティアを募り、次回以降「教える側」として教室に参加してもらう
民間企業側のメリット	・ 継続的に高齢者の顧客とつながることができる ・ ファンコミュニティ形成を省力化できる
民間企業と連携する際のポイント	・ ボランティア活動を希望する高齢者との日程調整など、ボランティア活動のコーディネートについては、生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が実施することが有効

【ケース情報】

①基本情報

83歳／女性／要支援2／戸建て／独居（夫他界）・娘家族近居（5分程度）

②本人の
生活の様子・
利用サービス

身体の状態

- ・ 脊柱管狭窄症により中長距離の歩行は困難。腰痛と下肢痛があり5分も歩けない。外出時にはサイドシルバーカーや歩行器を使用している。
- ・ 高度の難聴があり、身体障害者手帳（6級）を所持。左耳はほとんど聞こえず、右耳もかなり大きな声でないと聞こえないため、やりとりの困難さがある。
- ・ メニエール病により常に眩暈がある。転倒の可能性あり。

家事の状況

- ・ 家事全般は自立。自宅内も清潔である。
- ・ 買い物は近くの食料品店へ行き、店内ではカートを押して歩いている。娘がネットスーパーで頼んだものを自宅に届けてもらっている。
- ・ 調理も自分でしており、好きな物を作って食べるのが好きである。

外出の状況

- ・ 天気の良い日にはサイドシルバーカーを使用してお墓参りに行っている。
- ・ 歩行器を使用してバスや電車で外出し、不定期でショッピングモールに出かけている。
- ・ 体操教室や認知症カフェに以前は参加していたが、掴まる箇所がないことや難聴を理由に利用を中止した。

交流・娯楽の状況

- ・ 難聴により正面や耳元で声をかけてもらう必要があり、デイサービスでも交流することに遠慮があり孤立しやすい。
- ・ 花を育てたり、ダンス（ラウンドダンス、社交ダンスなど）をするのが趣味だったが、現在はできなくなった。読書や脳トレに毎日取り組んでいる。

フォーマルサービス

- ✓ 介護予防通所型サービス：週2回（下肢筋力向上のため本人の希望で利用）

インフォーマルサービス

- ✓ 娘による安否確認、調子の悪い時の通院介助

③本人の
望む暮らし

- ・ 身の回りのことや家事は引き続き自分でやりたい。
- ・ 出かけることや買い物が好きで、今後もショッピングモールで食事やウィンドウショッピングなどを続けたい。

④望む暮らし
を踏まえた
生活課題

- ・ 家族の訪問や友人との交流はあるが、難聴のため交流機会が減少してきた。
- ・ 下肢筋力の低下や眩暈により転倒の可能性がある。

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

- ◆ 体操教室や認知症カフェには歩行を補助するような掴まる箇所がないのか。運営者等からサポートを受けることは難しいか。

（生活において障害となっていることの確認から高齢者のニーズを深掘り）

体操教室には手すりや一部設置されているが、手すりのない箇所や置物があり掴まれない箇所もある。インストラクターと参加者20名ほどで実施しており世話役がいらない。マイクを使わず指示を出しているため難聴も通えない要因となっている。認知症カフェに行かなくなった背景として、周りは楽しんでいても、自分は聞こえず疎外感を感じていることが大いにあると感じている。

- ◆ ショッピングモールではどのように過ごしているか。ショッピングモール以外の外出先はあるか。（高齢者の生きがいや楽しみにつながる事項を深掘り）

1人でウィンドウショッピングをするのが好きなようだ。洋服店を見たり本屋へ行ったり食事に行ったりしている。友人と喫茶店に行くこともある。町内にはショッピングモールの代わりとなるような外出先はない。自治体のタクシーサービスを使用して行ける範囲でないと外出は難しいだろう。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- 歩行能力の低下や難聴により、高齢者の交流の場への参加や趣味の一部を諦めてしまっている。**難聴があっても（コミュニケーションを必要とせず）気兼ねなく出かけられる・参加できる場**に対するニーズがあると考えられる。

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）と官民連携による取組例

地域課題

難聴や認知機能の低下、会話が苦手などの理由により、コミュニケーションに難しさがあってもサービスを利用できるサポートの充実



民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

地域のスーパーや薬局等にコミュニケーション補助ツールやスローレジ等を導入することにより、難聴等のハンディキャップを引け目に思わずサービスを利用できる仕組みづくり

連携先候補となる民間企業

- ・ スーパー
- ・ ドラッグストア
- ・ コンビニ
- ・ 飲食チェーン店 など

取組例

- ・ 地域のスーパー等と連携し、利用客が文言やイラストを指差すことで店員にスムーズに意思を伝えられる「コミュニケーションボード」を導入
- ・ 地域のスーパー等と連携し、大きな声でゆっくりとコミュニケーションを取りながら会計ができるスローレジを導入

民間企業側のメリット

- ・ 高齢になっても顧客としてサービスを使い続けてもらうことができる

民間企業と連携する際のポイント

- ・ 生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が、ハンディキャップを持った当事者の声を収集し、サービスを使い続けるために効果的なサポートのあり方を丁寧に検討する
- ・ 「コミュニケーションボード」等を導入した企業については、自治体が集客に向けた広報活動などを積極的に実施することで、取組の持続性を担保

【ケース情報】

①基本情報

76歳／女性／要支援2／戸建て／

独居（次男：電話でのやり取りあり、甥：近居で適宜相談可能）／BMI23.5

②本人の
生活の様子・
利用サービス

身体の状態

- ・ 大腿骨頸部骨折等の影響により、右上下肢の痛みや体力の低下で徒歩での移動が難しくなってきた。
- ・ 以前は徒歩15分程度のショッピングモールまで歩いて買い物に行けていたが、現在は5分程で歩行がきつくなってしまう、徒歩で行くことは難しい。

外出・活動の状況

- ・ 転倒により骨折する前は自家用車で友人に会いに行ったり、友人と近くのショッピングモールや市内商店街などでウィンドウショッピングをしていたが、転倒を機に免許返納をしてからは外出機会が限られている。

通院・買い物の状況

<食料品等の生活必需品の買い物>

- ・ 訪問介護を週2回利用しており、週1回はヘルパーが食料品、日用品などの買い物を代行している
- ・ 知人の付き添いで月に1回病院受診をしており、受診の帰りにスーパーに寄ることもあるが、それだけでは食品が足りないことがある。

<嗜好品等楽しみのための買い物>

- ・ 以前は友人とのショッピングモールでウィンドウショッピングを楽しんでいたが、自身にも一緒に行っていた友人にも体力の衰えがあり、現在は行えていない。

フォーマルサービス

- ✓ 訪問介護：週2回／買い物代行、掃除の支援
- ✓ 通所介護：週2回／外出機会の確保、運動・リハビリ、他者との会話

インフォーマルサービス

- ✓ 福祉委員の定期訪問
- ✓ 知人による支援：月1回程度／通院・買い物の付き添い

③本人の
望む暮らし

- ・ 自宅内でずっと過ごすのではなく、外出して買い物や友人との交流を楽しみたい
- ・ 一人または友人知人とウィンドウショッピングなどに出かけて楽しみたい

④望む暮らし
を踏まえた
生活課題

- ・ 食料品をはじめとする生活必需品について、週1回ヘルパーの買い物代行を利用し、月に1回の通院のついでにスーパーで買い出しをしているが、それだけでは牛乳や豆腐などの食品が足りずに困ることがある。
- ・ 免許返納前は、車で出かけて友人に会ったり、友人とショッピングモール等でウィンドウショッピングすることを楽しみにしていたが、免許返納後は交流や外出の機会が減少している

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

- ◆ 訪問介護では買い物の付き添いではなく買い物の代行を依頼しているのか。それはなぜか。

（サービス利用の目的を確認することにより、高齢者の真のニーズを深掘り）

ヘルパーが週2回入っており、週1回は買い物代行、週1回は掃除を行っており、「付き添い」はしていない。週1回の買い物では足りない時があり、本人の希望で週2回とも買い物として利用することもある。それでも不足する場合には、病院受診のついでに、付き添ってくれる方をお願いして買い物に行くこともあるが、それでも不十分である。

- ◆ 食料品のうち、具体的には何が足りなくなってしまうのか。

（生活において障害となっていることの確認から高齢者のニーズを深掘り）

ヘルパーに対して遠慮があり、掃除も頼む場合もあるため、ヘルパーには大量の買い物は頼んでいない。豆腐や牛乳など週1～2回の買い物では足りないものがあり、それが自由に買えないことに悩んでいる。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- スーパーまで自力で行くのは難しいが、調理をする中で頻繁に食材が足りなくなるため、自力で必要な食材を調達したい。自分で食べる食材はなるべく自分の目で見て購入したい
- 週に1度の訪問介護でヘルパーに買い物代行を依頼しているが、ヘルパーへの申し訳なから大量の買い物は依頼できない

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）

地域課題

歩行能力等の衰えにより買い物に行くのが難しくなった高齢者が、食料品等の必需品をヘルパーに頼らず安定して調達できるための支援

民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

移動支援と買い物支援がセットになったツアーなどの提供

連携先候補となる民間企業

- ・ スーパー
- ・ ドラッグストア など

取組例

- ・ 特定のエリアの住人を近隣のスーパーまで移送し、一定の金額以上の購入者には自宅への配送サービスを行うなど、移動支援と買い物支援をセットで提供

民間企業側のメリット

- ・ まとめ買いの促進による客単価の向上
- ・ 自治体と連携することにより、一定の集客が見込める

民間企業と連携する際のポイント

- ・ 取組が地域に根付くまでは、生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が介入し、集客に向けた広報活動などを積極的に実施することが有効
- ・ 坂の多い地域や団地周辺など、配送サービスの需要の大きい地域を優先的に実施するなど、自治体が主導して取り組み地域を検討する

【ケース情報】

① 基本情報

82歳／女性／要支援2／戸建て（集落から離れた田んぼの中にポツンとある一軒家）
／長女夫婦と同居・日中独居・H30年に夫が他界／BMI24.5

② 本人の
生活の様子・
利用サービス

身体の状態

- ・ 過去に変形性脊椎症などを発症しており、腰や下肢にしびれや痛みを感じるため、服薬にて疼痛管理を行っている
- ・ 直近6月に2回転倒しており怪我などにはつながっていないが歩行に不安がある
- ・ 自宅内では建具などにつかまり、屋外では杖を使用して、転ばないようにゆっくり移動している
- ・ 買い物に行く際は、20分～30分程度自分で歩くことができる

家事の状況

- ・ 家事全般は自立
- ・ 同居している長女夫婦の家事も担当。（以前孫が同居していた時は孫の面倒も見ていた）

通院・買い物の状況

- ・ 高齢者が一定距離内を200円でタクシー移動できる自治体サービスを利用して自分でやっている ※本人に運転免許なし

交流・娯楽の状況

- ・ これという趣味はないが、隣町の通所型サービスに週2回通っており、PCや、友人とのカードゲームを楽しむ
- ・ 通所型サービスで実施している道の駅にも買い物イベントにも参加
- ・ 月2回程度自治体のタクシーサービスを利用して3～4km離れた喫茶店に友人とモーニングに出かけたり、同じ友人の家で寿司の出前を取ったりしている
- ・ ○年前まで隣町に住んでいたこともあり、近所に知り合いはあまりいない

フォーマルサービス

- ✓ 通所型サービス：週2回

インフォーマルサービス

- ✓ 高齢者が一定距離内を200円でタクシー移動できる自治体サービス

③ 本人の
望む暮らし

- ・ 引き続き家事などを自立して行う
- ・ 自宅から約500mの位置にある夫のお墓参りに歩いて行く

④ 望む暮らし
を踏まえた
生活課題

- ・ 基本的に自立であるが、今後、疼痛などによる活動量の低下から身体機能が低下する恐れがある。また、転倒に対する不安がある。

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

◆ この方は生活上何に楽しみを感じられているか。デイサービスを利用されているが、デイサービスへ行っている真の目的は何だと考えられるか。（サービス利用の目的を確認することにより、高齢者の真のニーズを深掘り）
同居している長女家族の家事炊事を担っていることもあり、デイサービスは自分だけの時間、自分だけの楽しみと思っているのではない。デイサービスでは友人と一緒にPCで遊んだりカードゲームをしている

◆ さまざまなアクティビティがそろっているデイサービスが楽しみの場になっていると思う。地域の他の資源で、類似の楽しみを高齢者に提供できるような施設はあるか。（介護保険サービスに代わる可能性のある地域資源の確認）
囲碁ができるスペースやカラオケを併設した入浴施設がある。また隣町に温泉併設の道の駅に、地元の農野菜が売っている大きい店舗やレストラン、散歩できる広大な芝生を併設した道の駅がある。運動施設では、隣町に一般向けのジムもある。ただし、運転のできない人にとっては、これらの施設に行くには自治体のタクシーサービスを使っても交通費が往復400円かかるので、昼食や送迎が一体的に提供されるデイサービスが魅力的なのだろう。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- デイサービスに通っている目的を踏まえると、同居している長女家族の家事炊事を担っていることもあり、責任感から逃れて自分だけの時間を過ごせる場所（いわゆる「サードプレイス」）を求めていると考えられる
- デイサービスが現状この方の「サードプレイス」になっている背景としては、デイサービスで運動だけでなく、友人との交流、カードゲームなどの娯楽、昼食、入浴等、魅力的なものが一体で提供され、送迎もついており、魅力的なものへのアテンド機能が非常に高い。こうした要素を一体的に提供できる場に対して、高齢者のニーズがある。

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）と官民連携による取組例

地域課題

- ・ 地域の高齢者のサードプレイス（居場所）づくり
- ・ 一つの場所で娯楽や食事、入浴など複数の楽しみを体験できる場所づくり



民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

喫茶店などで食事や娯楽を楽しみながら自分の時間を過ごせる“場”の提供

連携先候補となる民間企業

- ・ 喫茶店
- ・ 飲食チェーン店
- ・ 温浴施設 など

取組例

- ・ 公営施設で実施されている囲碁教室などの娯楽活動を、地域の喫茶店や飲食チェーン店、温浴施設等で実施することにより、食事や娯楽、入浴、交流など複数の要素をいっぺんに楽しむことができる“場”を提供する

民間企業側のメリット

- ・ コミュニティ形成によりリピート率が上がり、集客につながる
- ・ 滞在時間の延伸により客単価が向上する

民間企業と連携する際のポイント

- ・ コミュニティ形成が軌道にのるまでは、生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が介入し、集客に向けた広報活動などを積極的に実施することが有効

【ケース情報】

①基本情報	83歳／女性／要支援1／戸建て／ 長女と二人暮らし（長女は精神疾患で病状が不安定。市外に次女）／BMI27.0
②本人の 生活の様子・ 利用サービス	身体の状態 - 高脂血症、高血圧症（2003年頃） - 変形性腰椎症（2021年） 2022年12月、腰部の痛み、両下肢の痺れにより体動困難となり、寝たきり状態・オムツ内排泄となる。2023年1月、軽快。今後の生活への不安から介護保険を申請。 - 通所リハビリテーションやいきいき百歳体操の利用開始後、これまでの左下肢から足先までの痺れは軽減。しかし、動きすぎると腰が痛くなる。冬場の腰痛による寝たきりを強く不安視。 交流・娯楽の状況 - 川柳教室に10年通っている（月1回）。車移動。バス移動も可能だが、バス停まで500m歩く必要がある。 通院 - 通院先は、自宅から徒歩5分の距離にある病院。長女の体調が良ければ送迎を頼んでいる。 買い物・食事の状況 - 買い物先は、川柳教室の近くで、車移動。長女も運転して買い物に行くが、自分で食材を選んで調理したいという気持ちがある。 フォーマルサービス ✓ 通所リハビリテーション（2023年6月～） ✓ 予防福祉用具貸与（歩行器、2023年6月～） インフォーマルサービス ✓ 川柳教室（月1回、車移動） ✓ いきいき百歳体操（週1回、自宅から300mの集会所、杖を使って徒歩移動）
③本人の 望む暮らし	- 川柳教室に継続して参加する。 - 長女に頼ることなく、外出や身の回りのことをご自身で行う。
④望む暮らし を踏まえた 生活課題	- 下肢筋力の向上 - 免許返納の予定あり。返納後の川柳教室への参加、ご自身での買い物の継続に向けた移動手段の確保

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

◆ 川柳教室に参加したい理由は、川柳の腕を磨きたいから、参加者と交流したいからか。

（高齢者の生きがいや楽しみにつながる事項を深掘り）

川柳の腕を磨きたいからだ。川柳教室の先生が良いそうだ。何でもしっかり調べてから始める方である。もともと和歌に興味があり、川柳を初心者から10年間続けている。これからも継続したいのだろう。

◆ 自分で買い物をしたい、食事を作りたいという希望があるが、買い物や調理が楽しみや気分転換につながっているのか。（高齢者の生きがいや楽しみにつながる事項を深掘り）

バランスの良い食事を取りたい、季節のものをおいしく食べたいという気持ちがある。同居の長女の分も調理している。同居の長女が支援することもあるが、自分で選んで調理したいようだ。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- 「川柳の腕を磨くこと」が生活の楽しみになっており、自動車免許返納後も教室に通い続けたいが、趣味のために家族に送迎を頼むことは難しい
- 家族等に負担をかけるのであれば、自宅でできる趣味を見つけて楽しく過ごしたい

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）

地域課題

デジタルを活用することにより、自動車免許返納後も楽しみを継続し、高齢者のQOLの高い生活を実現する



民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

オンライン上のコミュニティを活用して趣味で人とつながれる機会の提供により、家に居ながら趣味を楽しめる、人とつながれる環境をつくる

連携先候補となる民間企業

- ・ シニア向けコミュニティのプラットフォーム事業者 など

取組例

- ・ スマホ教室などデジタルに関心のある高齢者が集まる場で、趣味でつながるオンラインコミュニティ等を紹介

民間企業側のメリット

- ・ シニアへの利用者層の拡大につながる

民間企業と連携する際のポイント

- ・ ネットを利用できる環境等が前提となるため、デジタルに関心がある高齢者が集まる場を自治体側で用意し、企業がサービスを周知しやすい環境を整えることが有効

【ケース情報】

①基本情報

77歳／男性／要支援2／戸建て／独居（妻・長女家族：市外在住、車で1時間程度の距離。兄夫婦：隣家に居住）／BMI22.5

②本人の生活の様子・利用サービス

身体の状態

- ・ 2020年、心原性脳梗塞。血压管理が必要。
- ・ 2022年8月、変形性腰椎症、腰椎圧迫骨折
- ・ 2022年12月、変形性頸椎症
- ・ 左上下肢片麻痺。力が入りにくく膝崩れあり。

健康管理・通院の状況

- ・ 「気を張って移動しているときには膝折れしないため転倒の心配はない」との発言があった。
- ・ 自分の判断で通院や内服を止めてしまっている。血压管理も行っていない。

買い物の状況

- ・ 体調が良く、気が向いた時はスーパーに行き、総菜を購入。（自宅から約150m、徒歩）

交流・娯楽の状況

- ・ 趣味である釣りに行けていない。
- ・ デイサービスの利用を調整したが、本人の希望で利用を中止した。

フォーマルサービス

- ✓ 福祉用具貸与：キッチン・通路・階段の手すり

インフォーマルサービス

- ✓ 長女：通院時等の訪問
- ✓ 兄夫婦：日常生活の見守り・声かけ、不定期な食事の提供
- ✓ 以前利用していたデイサービス職員による声かけ

③本人の望む暮らし

- ・ 釣りに行きたい気持ちがある。
- ・ (家族)釣り場で尻もちをついたことがある。あまり行ってほしくない。
- ・ (家族)大きな病院に行ってほしい。専門職に介入してほしい。

④望む暮らしを踏まえた生活課題

- ・ 一人で釣り場に行けず、趣味である釣りができないことにより、自宅からでる機会が減少。
- ・ (家族/支援者)定期的な通院。運動機能の向上。

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

◆ 生活へのこだわりがあるケースだが、本人の心が動くものはあるか。

（高齢者の生きがいや楽しみにつながる事項を深掘り）

釣りに興味があるようだ。以前は陸釣りをしていた。現在は身体状況からを諦めてしまっている。陸釣りの釣り場は1つのコミュニティになっていた。趣味であった釣りのコミュニティに戻ることは、本人の心が動くことだと思われる。

◆ 趣味である釣りをするサークル等、地域に本人が利用できる資源はないか。

市民には釣りが好きな人が多い。また、市内でデイサービスの職員が釣りサークルの活動をしている。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- 家族やケアマネジャーの介入をなるべく受けずに自由に過ごしたい希望があり、デイサービス等には馴染みにくい。
- 趣味であった釣りのコミュニティに戻ることは本人の楽しい気持ちを引き出し、社会参加や活動を増やすことができる可能性がある。

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）

地域課題	・ 通いの場などに参加することはないが、特定の趣味（釣り等）がある男性高齢者の社会参加促進 ・ 活動の継続につながる（強制しない）ゆるやかなコミュニティの形成
------	---



民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

趣味を活かして人や地域に貢献できる機会の創出による社会参加促進

連携先候補となる民間企業	・ 地域の宿泊施設 など
取組例	・ 地域の民泊やホテルなどの宿泊施設と連携し、観光客に釣りを教えるボランティアとして高齢者の協力を得るなど、趣味を活かした地域貢献の機会を創出する
民間企業側のメリット	・ ボランティアとして地域の高齢者の協力を得ることにより、サービス提供やファンコミュニティ形成を省力化できる
民間企業と連携する際のポイント	・ 取組の初期は生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が積極的に介入し、ボランティアの「場」を提供する企業（宿泊施設等）と、ボランティア活動を希望する高齢者のマッチング等を支援する必要がある

【ケース情報】

①基本情報	80歳／女性／事業対象者／戸建て／長男夫婦・嫁の母と3世帯5人暮らし（夫は約20年前に他界、1年前に長男宅に転居）／BMI22.3
②本人の生活の様子・利用サービス	身体の状態 ・ 20年前より、高血圧で通院し、内服治療中。 ・ 足の上が悪い。2023年4月、歩行中に転倒。 ・ 2023年8月、白内障手術。 運動・健康管理の状況 ・ 通所Cに参加している。 ・ 手すりを使わずに階段を昇降する自主練習をしている。 ・ 徒歩で散歩や買い物に行っている。 交流・娯楽の状況 ・ 転入前は、デイサービスに週2回通っていた。また、独居であったが、友人が多かった。手芸やパソコンを楽しみにしていた。 ・ 地域にある交流の場（サロン等）に積極的に参加している。 ・ パソコン教室（自宅から徒歩30分）に参加していたが、現在は参加できていない。 フォーマルサービス ✓ 通所C インフォーマルサービス ✓ 介護予防教室 ✓ 地域のサロン
③本人の望む暮らし	・ 今後も地域の活動に参加し、交流を継続する。 ・ 電車で1時間～2時間程度の距離に住んでいる次男・三男や妹の自宅に訪問する。
④望む暮らしを踏まえた生活課題	・ 転居のため、町内に友人がいない。同居家族との積極的な交流がない。 ・ 運動方法が分からず、歩行が不安定になることや筋力低下についての不安がある。

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

- ◆ **通所Cに通い始めた理由は何か。** （サービス利用の目的を確認することにより、高齢者の真のニーズを深掘り）
 転入前は、デイサービスに週2回通っていた。散歩中に会った元気な人からデイサービスに通っているという話を聞いて、同じような場所に行きたいという相談があり、利用に至った。利用開始前は全12回のプログラム終了後も通い続けたと言っていたが、現在は利用終了に前向きである。
- ◆ **高齢になってから転入したことによる課題はあるか。**
 転入前は友人が多かったケースであり、一緒に外出できるような友人が欲しいのではないかと考えている。
- ◆ **パソコンに加え、スマートフォンも使用できるのか。**
（利用できるサービスの検討のため、デジタルの使用状況を確認）
 既にかなり使用していると思う。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- 高齢になってからの転居であり、地域に友人が少ないため、交流したい、一緒に外出できる人がほしいという気持ちがあるのではないかと。
- 転入者がすでにあるコミュニティに参加するのは一定のハードルがあるため、コミュニティ参加のきっかけづくりをサポートすることが有効であると考えられる。

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）

地域課題

高齢になってから息子・娘と一緒に暮らすために転居した高齢者の活動継続・社会参加支援、コミュニティ参加のためのきっかけづくり



民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

得意なことで地域貢献やコミュニティ参加ができる仕組みづくり

連携先候補となる民間企業

- ・ 地域貨幣の運営事業者 など

取組例

- ・ 地域貨幣、地域ポイントの仕組みを活用し、買い物支援のボランティアなど、シニアのボランティア活動にポイントを付与することで、社会参加のきっかけとする

民間企業側のメリット

- ・ ユーザーの増加につながる

民間企業と連携する際のポイント

- ・ 生活支援コーディネーターや民生委員等が連携し、「高齢になってからの転入者」など、社会参加のきっかけを必要としている高齢者に広げるよう取組を後押しすることが有効

【ケース情報】

①基本情報

85歳／女性／要支援2／認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲa／BMI 25.2
／戸建て／夫婦2人暮らし・息子家族が敷地内に居住

②本人の
生活の様子・
利用サービス

身体の状態

- ・ 屋外はシルバーカーを使用。近所であれば夫の付き添いのもと外出可能。
- ・ 数年前から、薬の飲み忘れや火の消し忘れなどが見られるようになった。

家事の状況

- ・ 掃除・洗濯は妻が担い、時間はかかるが自分のペースで行っている。
- ・ 調理は短時間で簡単な調理（電子レンジ・炊飯器など）は妻が行っている。
- ・ 買い物は近隣のスーパーへ息子の介助のもと週1回夫婦一緒に行く。

外出・交流の状況

- ・ 週2回徒歩15分ほどの距離の喫茶店に夫婦で1台のシルバーカーを押して行き、友人・仲間と話をしている。
- ・ デイサービスに週1回夫婦一緒に通っている。デイサービスでも夫婦で行動を共にし、脳トレをしながら同席の方と談話したり、施設内を散歩したりしている。
- ・ 喫茶店（週2回）、デイサービス（週1回）、買い物（週1回）以外の外出はない。
- ・ 町外在住のひ孫に会うことを夫婦ともにとても楽しみにしている。

喫茶店（夫婦にとって重要な外出先・交流の場）の状況

- ・ 店主が高齢であることを理由に今春閉店予定。
- ・ モーニングで午前中は来客が多いが、昼以降は空いている。客は主に地元の高齢者。
- ・ ご夫婦の友人・仲間は6～7人。男性は夫のみ。

フォーマルサービス

- ✓ 通所介護：週1回
- ✓ 短期入所：月1泊2日

インフォーマルサービス

- ✓ 通いの場となっている喫茶店（週2回）での友人との交流
- ✓ 息子による買い物や通院の介助、服薬や金銭管理の見守り

③本人の
望む暮らし

- ・ 今できている家事を続け、夫婦一緒に自宅で生活をしたい
- ・ 夫婦で一緒に外出し、友達との交流を続けたい

④望む暮らし
を踏まえた
生活課題

- ・ 通いの場となっている喫茶店が閉店してしまうと、外出・交流の機会が減少してしまう

【ケースの深掘りによるニーズの検討】

◆ 通っている喫茶店が閉店した場合、代わりとなる通いの場はあるか（地域資源の確認）

他の喫茶店は距離が遠く、移動がハードルになる。もし別の良い喫茶店があったとしても、そこではなく、馴染みの喫茶店に行きたいのと思う。喫茶店としてコーヒーやパンを提供できなくても、椅子さえあれば自然と会話が生まれるようなイメージは湧く。

◆ 喫茶店が閉店することにより、このケースの方以外も行き場がなくなるのではないか

（地域に共通するニーズや課題の確認）

店主も地方の方であり、情報交換や世間話などを行っている。喫茶店は、そこに行けば誰かに会える場として機能していると思う。シルバーカーを押して通う高齢者も多く、地元の高齢者が他愛無い会話をする日々の楽しみの場となっている。喫茶店の店主自身も、閉店したら要介護状態になってしまう可能性もある。

本ケースの真のニーズ・高齢者の本音

- 喫茶店が地元の高齢者の通いの場として機能しているが、近々喫茶店の閉店が予定されており、**外出・交流の機会が失われてしまう**という懸念がある。これはこのケースの方に限らず、その喫茶店に集っている高齢者や店主も共通して抱えている課題である。
- 常連客の多くは、その喫茶店を**“行けば誰かに会える場”として価値を感じている**と思われるため、モーニングサービスが提供できなくなったとしても、その喫茶店を**集まれる場として残したい**という気持ちがあるのではないか。

本ケースから見える地域によくあるニーズ（＝地域課題）

地域課題

通い慣れた「場」としての喫茶店等が閉店しても、
つながりが途切れず仲間と接点を持続けられるための支援



民間事業者と連携した地域課題解決のための取組アイデア

住民の協力のもと、喫茶店のあった場所で新たなサービスを運営

連携先候補となる民間企業

- ・ 移動販売事業者 など

取組例

- ・ 喫茶店のあった場所に移動販売等を呼び込み、その運営を地域のシニアのボランティア等が支援する仕組みの構築

民間企業側のメリット

- ・ もともとコミュニティがあった場所への出店となり、一定の集客が見込める

民間企業と連携する際のポイント

- ・ 集客やコミュニティ形成が軌道にのるまでは、生活支援コーディネーターや地域包括支援センター等が介入し、集客に向けた広報活動などを積極的に実施することが有効

No. _____

適宜シートをコピーしてご作成ください

ADL状況

	項目	事前判定	事後判定	課題	
				個人因子	環境因子
A D L	室内歩行				
	屋外歩行				
	外出頻度				
	排泄				
	食事				
	入浴				
	着脱衣				

IADL状況

	項目	事前判定	事後判定	課題	
				個人因子	環境因子
I A D L	掃除				
	洗濯				
	買い物				
	調理				
	整理				
	ごみ出し				
	通院				
	服薬				
	金銭管理				
	電話				
	社会参加				

【凡例】

自立度	自立		一部介助		全介助	
困難度と改善の可能性	楽にできる	少し難しい	改善可能性高い	改善可能性低い	改善可能性高い	改善可能性低い
判定	○1	○2	△1	△2	×1	△2

No. 1

ADL状況

	項目	事前判定	事後予測	課題	
				個人因子	環境因子
A D L	室内歩行	○2	○1↑	ふらつきあり伝い歩き	要所に掴まる所あり
	屋外歩行	○2	○1↑	段差でつまずく	段差に手すり設置
	外出頻度	○2	○1↑	畑に週3回電動付き三輪自転車で行く	家の周りが急な坂
	排泄	○1	○1	自立	
	食事	○2	○1↑	自立 むせ込み軽減	嚥下体操に通う
	入浴	○2	○1↑	浴槽へは慎重に入る	壁に手すりあり
	着脱衣	○1	○1	座って着替える	

IADL状況

	項目	事前判定	事後予測	課題	
				個人因子	環境因子
I A D L	掃除	○1	○1	自立	
	洗濯	○1	○1	自立	
	買い物	○1	○1	宅配生協	長女と行く事もある（月2回）
	調理	○1	○1	自立	
	整理	○1	○1	自立	
	ごみ出し	○1	○1	自立	
	通院	○2	○2	妻と行く	●●利用
	服薬	○2	○2	時々飲み忘れる	妻と声を掛け合っている
	金銭管理	○2	○2	支払いは出来る	ATM操作は長女が行う
	電話	○1	○1	自立	
	社会参加	○2	○1↑	畑で仲間と談笑 ●●、●●に参加	

【凡例】

自立度	自立		一部介助		全介助	
困難度と改善の可能性	楽にできる	少し難しい	改善可能性高い	改善可能性低い	改善可能性高い	改善可能性低い
判定	○1	○2	△1	△2	×1	△2